聖徳太子の謎

V・コゼブニコフ
極東国立総合大学　東洋学大学

「古代史の中で、よく知っている人物を一人あげてください」と尋ねられれば、多くの人が「聖徳太子」の名前をあげるに違いない。なぜかと言うと聖徳太子といえば、古代史の英傑という印象があるからである。

では、聖徳太子の何が偉いのかと聞かれれば、意外に答えに窮するのではあるまいか。日本でも、ロシアでも、少し歴史の成績が良かった人なら、「憲法十七条」や「冠位十二階」の制定、そして「遣隋使の派遣」という、それこそ教科書通りの答えをするに違いない。

聖徳太子について語ることは日本古代史について語ることである。

1868年以降、日本では聖徳太子について、三百冊以上の本、一千以上の論文が執筆された。残念ながら、ロシアでは聖徳太子に対する科学的関心はあまり高くない。特別な本は一冊もなく、幾つかの論文によってだけ、彼の功績が分析されている。メシャレコフ教授だけが聖徳太子の歴史的肖像の作成を試みられている[1]。

それにしても、その実像が曖昧模糊として多くの謎に包まれている人物も珍しい。それがゆえに、近年になり、これら聖徳太子の業績は、どこまで真実だったか、じつに怪しい、といわれるようになったのであろう。事実、聖徳太子を巡る謎は多い。ここで幾つかの謎について述べたい。日本ではこの謎は詳細にわたり議論されているが、ロシアの学会での議論は殆どないからである。

1　太子はウマヤド皇子と名付けられた。この名前の由来は古来一つの謎とされている。

彼には幾つかの名前があった。ウマヤド皇子、豊聡耳聖徳・豊聡耳・法大王、上宮ウマヤド、聖徳太子、等である。ウマヤド皇子同様、馬小屋で生まれた偉人といえば、すぐにキリストを思い出す。ネストリウス派のキリスト教、中国の景教―キリストのキを景に当ててキ教といっているのだが―その影響のなかで、キリストの出生譚が聖徳太子の上にも及んでいるのではないかという説が久米邦武氏以降、出されている。

たしかに、このことを見過ごすことはできない。しかし、馬小屋で生まれたのはキリスト教の話のなかだけだと決めてしまうのもまた短絡的であろう。中西進教授は「王妃と馬の交接」という論文を書かれている。その論文では、インドの古い祭が一番典型的なものとされ、王妃は馬と一夜を共にする。それが国家最大の儀式になり、そのことによって国家が繁栄すると考えられている。

それは古代の世界ではグローバルに広がっていたものらしい。キリスト生誕は、この最大の密儀に結びつけることによって、権威化された。馬が相手だから、夫はいないのが当然で、夫がないにもかかわらず、子供が生まれたことが聖母マリアの信仰につながる。

このようなことから考えると、聖徳太子の出生に当たって、やはり馬と聖なる女

姓との婚姻という、今ではすでに古代の帳の中に隠されてしまった古代最大の密儀の投影があったのだろう。

中西氏は、結論として、それを、キリスト教を通して『日本書紀』に受容されたということもあるかもしれないが、必ずしもそうと限らずに考えるべきであろうと述べている。聖徳太子の名前については、後で詳しく述べることとする[2]。

2　「憲法十七条」と「冠位十二階」の謎。

日本の国家制度を整える、「憲法十七条」と「冠位十二階」は聖徳太子の政治的な実績として最も代表的なものとされているが、果たしてそうなのか、これを疑う説がある。例えば、ある研究者は「大臣の馬子が中心になって推進したもの」ではないか、と述べる。

「憲法十七条」は今日考えられるような罰則をともなう法律ではなく、いわば政治を進めていくうえでの儒教や仏教や法家の思想に基づく徳目をあげたものである。『書紀』には明確に太子作と書かれているが、津田左右吉氏条文のなかに「国司」のような律令制の時代にならないと使われない言語があることなどから、太子の作ではなく『書紀』編集者が作文したものである、との説を展開している。また、ある研究者は、「憲法十七条」は太子自身が起草したものではなく、中国の書物から、適当な文書を拾い集めて起草したものと見ている。

太子の摂政としての仕事も謎である。彼は593年に摂政に任じられたことになっているが、実際、聖徳太子の政治活動が本格的に開始されるのは600年の遣隋使からである。それはなぜか。10年間、何をしていたのか。

もう一つの謎は、偉大な政治家である聖徳太子の名前は『書紀』には605年から622年まで５回しか上げられていない。

しかしながら、「憲法十七条」は、今日の学会でも太子作とする説が有力で、太子の名誉は何とか維持できそうである。

3　遣隋使の派遣をめぐる謎。

日本が中国の隋帝国へ遣隋使を派遣したのは、聖徳太子の発案であるとされ、『日本書紀』では最初の派遣を607年のこととしている。しかし、中国の正史『隋書』には倭王として登場し、そのうえ、これより７年前に使節がやってきたと書かれている。『日本書紀』が７年前の遣隋使を記述しなかったのはなぜか。中国側に登場する「倭王」は太子か、馬子か、推古女帝か、謎は多い。「日出ずる処の天子、国書を日没する処の天子に送る、恙なきや」という有名な表現だ。聖徳太子はこの言葉を書いたかどうか。疑問が残る。

4　三経義疏と法隆寺の謎。

たとえば、『日本書紀』のなかに太子が『三経義疏』を作ったという記述はない。『書紀』には太子が推古天皇に「二経」を講義したことは書かれているものの『三経義疏』を作ったという記述はない。これがなんとも不思議である。法隆寺は670年の火災で全焼し、現在の法隆寺はその後に再建されたものとされるが、『書紀』には太子が再建前の元の法隆寺を建てたという記録がない。法隆寺の謎は多く、これは別のテーマである。

5　太子の死をめぐる謎もある。

例えば、太子が49歳でなくなったのは、『書紀』では621年となっているが、他の資料では、すべて、622年とされている。どちらが正しいのか。死の原因について『書紀』は何も語らない。なぜ『書紀』は沈黙するのか。彼は彼の妃といっしょに亡くなっている。病気だったのか、自殺だったのか。亡くなる前に太子は妃に「私は今夜あの世へ行くだろう、おまえも私と一緒にくるが良い」と言った。不思議なのは殯はとても短かった。普通は場合によっては１年も殯が行われることがある。短い殯は異常な死の場合にだけ行われた。病気説と自殺説を結びつけて、太子は病気を苦に自殺したと説く人もいる。これには深い分析が必要である。

6　太子の「聖化者」になる謎。

太子の外に、日本の政治家の中に「聖者」は一人もいなかった。この謎についてもっと詳しく話したい。

多くの人が聖徳太子を聖人だと思うであろう。太子が急死した後、国民は泣き、農民たちは手を休め、稲をつく女は杵を止めた。聖徳太子は皇太子だったが即位したわけではない。歴代の天皇でもここまで「神扱い」された人物は他に例がなく、その理由がよく分からない。だから、聖徳と呼んでいる。しかし、違う意見もある。「聖徳太子は怨霊である」―哲学者梅原猛氏は断言した。1972年に出版された「隠された十字架」のテーマは明快である[3]。同書はベストセラーになったが、歴史学会のみならず宗教界においては、当然否定的な意見もある。

にもかかわらず、643年太子の子孫23名（一説には22名）、一族全員が死に追いやられたのである。自殺であるが、事実上は惨殺といってもよい。偉大な人物は悲劇的な最期を遂げると怨霊になると日本人は信じてきた。しかし、神として手厚く祀ることによって怨霊は守り神になる。怨霊を祀るのは神社であったが、梅原氏は、聖徳太子の寺、法隆寺を、「太子の怨霊を鎮魂するための寺」と解釈したのである。

梅原氏の功績は二つある。一つは太子の復権であり、法隆寺の持つ意味を探ることである。もう一つは当時、歴史学会を覆っていた『書紀』否定、合理主義に押しつぶされていた歴史観に対して異をとなえたことであった[4]。

聖徳太子が「聖徳」とよばれるようになったのは、上原和氏の指摘するように「如来の功徳の聖徳無量」、すなわち「仏教」に由来するのだろうか。

そう思わない研究者もいる。馬戸皇子は立派な皇子だった。仏教の理解者で、篤信者で、しかも人徳あふれる人だった、だから「聖徳」とされたのだ－このような考え方は、いわゆる「合理的」な考え方である。「当たり前」のことだ。「徳の」ある立派な人「聖徳太子」なのか。結論はまだ出されていない。今後の考察と議論が不可欠である。

もし「聖徳」という「諡」が、本当に太子の「徳」を讃えて贈られたものだとすれば、太子以後に「徳」の字を贈られた人々は、やはり何らかの意味で「徳」があった人だ、ということになる。

しかし、それには疑問も残る。もちろん諡号などというのは、めったな人におくられるものではない。聖徳太子は身分としては皇太子だが、皇太子で、諡号を贈られた人は歴史上珍しい。殆どの場合、天皇である。[5]

では、太子以後の、諡号に「徳」の字がある天皇たちを調べてみると、実に六人

しかない。孝徳天皇、称徳天皇、文徳天皇、崇徳天皇、安徳天皇、順徳天皇である。実は、この他にもう一人いたのだが、この天皇のことはこの後で触れることにする。この天皇は重大な鍵を握っている。

まず、先に述べた六人の「徳」の字のつく天皇たちについて考察したい。

実はこの六人が六人とも、まともな死に方をしていないのである。事実上殺された人もいれば、島流しにあった人もいる。また、一見、幸福な生涯を送ったように見えるが、実は「無念の死」であり、「憤死」であると認められる人もいる。

さらに、この六人の天皇たちについて一人ずつ検証したい。

孝徳天皇　－この人ほど屈辱的な目に遭わされた天皇も珍しい。暗殺されたわけではないが、ある意味で死にまさる屈辱を味わった気の毒な天皇なのである。大化の改新のあと天皇になったが、中大兄皇子の傀儡だった。その他、中大兄皇子は自分の妹を孝徳天皇に嫁がせた。ところが中大兄と間人は、兄妹でありながら愛人関係にあったとされる。最後は一人で難波で崩御している。どう考えても「徳のある立派な人」とは思えまい。むしろ「不幸で、気の毒な人」に「孝徳」という名前が贈られているのである。

二人目は称徳天皇。この人は女帝である。「愛人」の弓削道鏡を天皇にしようとした天皇である。天皇には天皇族の血筋をひいた者しかなれないのに、この大原則を破って称徳女帝が寵愛する仏僧道鏡を天皇の位に就けようとしたいわば事件である。その途上、さまざまな障害に遭い、ついにその念願をはたすことなく死んだという。称徳女帝の死は急であったため、暗殺であるとか、病気であるとか、いろいろな説がある。この場合も不幸な生涯の例である。

三人目は文徳天皇である。彼は最愛の妃が生んだ第一皇子を皇太子にできなかった。太政大臣藤原義房が、自分の娘が生んだ第二皇子を皇太子にしろと圧力をかけたからである。若くして急死し、その結果、天皇家が、まだ少しは保持していた政治の実権を根こそぎ奪われてしまった不幸な天皇である。彼も「徳がある立派な人」ではない。むしろ「無念の死を遂げた不幸な人」なのである。そういう天皇に文徳という諡号がおくられたのである。

次に、崇徳天皇である。この人は本来説明する必要もないであろう。この人が怨霊であるということは、少し日本歴史を知っている人にとっては、常識であるとすらいえる。にもかかわらず、贈られた諡号は崇徳なのである。

これでも「徳」の字と怨霊は関係ない、別の言い方をすれば、「聖徳」は怨霊でない、と主張することができるであろうか。

あとの二人の天皇について、安徳天皇は８歳になったころ、壇ノ浦の戦いの時に崩御した。しかし、この若い天皇は「安徳」と呼ばれているのである。

六人目は順徳天皇である。彼は鳥羽天皇の反幕府のクーデターの後、流罪されることになった。そして順徳天皇は都へ帰ることなく、流罪地の佐渡で死んでいる。だからこそ彼は「順徳」なのである。

しかし、一つの疑問がある。後鳥羽と土御門の両上皇も島流しにされたにもかかわらず、この二人は「徳」をつけられることがなかった。

土御門上皇に関しては、状況が少し異なる。彼は順徳上皇とちがって、承久の乱に関与しなかったため、倒幕を志してはいなかったのだ[6]。ゆえに、順徳上皇には「徳」がつき、土御門上皇には「徳」が付かないのである。

では、後鳥羽はどうなのか。彼は順徳と同じである。その上に、倒幕の主謀者は

後鳥羽なのであるから、それが失敗したことに対する怨念は、順徳以上だろう。それなのになぜ「徳」がつかないのか。

実は、初めはついていたのである。彼は死後４年間「後鳥羽」ではなく「顕徳（けんどく）院」と呼ばれていたのだ。これは歴史上の事実である。1239年に「顕徳」院の諡号が贈られた。ところが1242年にその諡号が「顕徳」から「後鳥羽」へと改められたのである。これは極めて異例のことであった。何故、そのような異例なことが行われたのか。井沢氏の考察によれば、顕徳院の怨霊がタタリをなしたからである。この見解は歴史辞典にも記されている。

もちろん「怨霊」など一切信じない人もいるだろう。しかし、肝心なのは上皇の死後、異変が起こり、その異変は上皇の怨霊の仕業だと信じられていた、という事実である。怨霊の鎮魂の手段としては「神として崇め祀る」という、極めてオーソドックスな手段であった。

それと共に行われたもう一つの手段があった。それが諡号を改めることであった。「顕徳」は「徳を顕す」なのだから極めて良い名前だという「合理主義」にとらわれているうちは、決して日本史の真相は見えない。では、どう考えればいいのか。簡単である。

当時の人々が怨霊を鎮魂するために、「顕徳」から「後鳥羽」にした、ということは、「顕徳」というのは一見良さそうだが実は悪い名前だと当時の人々が考えていたということではないか。「徳」という字が「無念の死を遂げた怨霊におくられる「専用」の文字であった。いわば「贈徳の字方式鎮魂法」である。ところがこの「鎮魂法」、時代を下るに従って、効力が薄れてきた。そこで、「顕徳」は捨てられ、「後鳥羽」というむしろ平凡な諡がおくられた。「贈徳の字方式鎮魂法」には終止符を打たれたのである。そして、これ以後「徳の字」天皇は一人も出ていない。となれば、この「徳の字」方式のそもそもの始まりである「聖徳」太子が、怨霊と見られていたこともまた、確実ではないだろうか。なぜ、「徳」という字が、怨霊の鎮魂するために使われたかという問いにたいする、答えに、時間がかかるかと言えば、簡単に答えられるのである。中国的発想と日本的発想の違いである。中国では一番重要なものに徳がある。日本では－怨霊を鎮魂することである。

日本では怨霊が次々に発生し、世を惑わす、そのような怨霊は鎮魂して「御霊」すなわち「良い霊」に変えなければならない。その悪霊から善なる神に転化した時、その転化した人をわれわれの祖先は「聖」と呼んだらしい。つまり、「聖」というのは、本来怨霊となるべき人が、善なる神に転化した状態を表現した文字だということである。

いずれにせよ、仏教や儒教でいう「聖徳」と「聖徳太子」の「聖徳」は似ているようで、実は違うものではないか。

この謎と、ここでは言及しなかったその他の多くの謎に基づいて、「聖徳太子は実在しない」と強調する見解も現れた。すなわち、「聖徳太子などという偉大な人物は存在しない。厩戸皇子という凡人がいただけである」ということを意味する[7]。こう主張する人々は、太子の功績といわれるものは殆ど嘘である、故に聖徳太子と呼ぶなどとはおこがましいと、断じたわけである。

この深い謎をどうやって解き明かせばいいのであろうか。聖徳太子の謎は、このように、やや長いスパンで古代史を見つめ直していく必要性を、われわれに求めているのである。今後、ロシア学会もこの謎の解決に参加していかなければならな

い。謎の究明に力を注いでいく必要がある。

注

1 A. N. Mesheryakov. *Geroi, tvortsy i khraniteli yaponskoi stariny*. Moscow: Izd-vo "Nauka," Glav. red. vostochnoi lit-ry, 1988. Pp. 21–49.
2 中西進『「謎に迫る」古代史講座』東京：ＰＨＰ研究所、2002。54頁。
3 梅原猛『隠された十字架：法隆寺論』東京：新潮社、2006。
4 米陀黎子『聖徳太子に祈る：消された一族の女たち』東京：新人物往来社、2007。13-15頁。
5 井沢元彦『逆説の日本史（２）古代怨霊編』小学館文庫、1998。132頁。
6 井沢前掲。174頁。
7 谷沢永一『聖徳太子はいなかった』東京、新潮社、2004。222頁。